

『自分と対話する、向き合う時間が不可欠。その秘訣が学べるはずです。』

～福川伸陽（NHK 交響楽団首席ホルン奏者）～

—福川さんと初めてお会いしたのは、キャリアアップゼミに登壇いただいた時でした。当時のアカデミー生からも「これまでの中で最も面白かった！」という反応があった、強く惹かれる内容でした。福川さんの多岐にわたる活動の原動力とは、何なのでしょう？

福川●演奏者の方それぞれ、多種多様な考え方があると思います。現在、オーケストラに軸を置きながら、ソロの活動はもちろん、室内楽やフェスティバルの企画などもしています。その理由は、一つのことばかりやっていると応用力が身につかないと感じているからです。「ホルン奏者」「オーケストラ団員」「クラシック音楽」と細分化された世界ばかり極めていても、楽器の演奏者としてはいいのかもしれないけれど、「音楽家」としては不足していると感じています。日本人が重視する「正確さ」も細分化された世界、音楽の一部でしかないと思います。例えば、今まさにドビュッシーに取り組んでいるとしましょう。ドビュッシーと、モネなどをはじめとした印象派の画家の関連性はよく取り上げられますが、スマートフォンの画面を通して「あああのかの絵か。」と知った気である人と、美術館でモネを間近で観て気づいた筆使いから「こんな感じで演奏したらどうなるだろう」と感じた人、どちらの演奏に聴き手は魅力を感じるのでしょうか。こういった自分と対話をする時間は精神性を高め、自分の音楽を豊かにしてくれます。私自身、今でも視野が広がっていく毎日を楽しんでいます。

—例えば SNS を覗くと、次から次へと演奏会の告知や報告が流れてきますが、焦りや「こうならなければならない」という強迫観念が、無意識に助長されているように感じます。

福川●自分が学生だった頃は SNS もなかったもので、友達と音楽の話をし続ける毎日でした。しかし今、会話はオンラインという公で繰り広げられがちです。常に周りの雰囲気を感じなければならず、苦しいですね。でもそんな時代に、自分が「こうである」と、良い意味で保つことが芸術家の条件だとも思います。心の余裕と自信が必要になってきますが、それを生むには、自分と向き合う時間が不可欠です。今回集った、アカデミー生と共に歩む多様なバックボーンをもった講師陣は、その秘訣を教えてくれるに違いありません。自分が大学を卒業したてだったとしたら、是非参加したいです。

『演奏のプロであると同時に、音楽の世界を外から眺める視点を養う』

～木許裕介（指揮者、キャリアアップゼミ・キュレーター）～

—「大学では学べないこと」をコンセプトに、本当に幅広い講師陣とキャリアアップゼミを進行していただきました。木許さん自身、新たな取り組みだったと思うのですが、感触はいかがですか？

木許●予想していたより遥かに手応えがあった、というのが正直なところ。「大学では学べないこと」というコンセプトを私なりに五つの問いに変奏しました。毎回3時間、しかも音楽に限らず、様々な講師が縦横無尽に議論するハードな講義にどれだけの学生がついてきてくれるのかなあと考えていましたが、みなさんにきちんと意図が伝わり、大変に面白がってもらえたのではと思います。

—「音楽大学卒業」という肩書きがなければ、活動が難しいと思われている中で、木許さんはその肩書き無しで国際的に活動されていますが、その視座からみた「音楽大学卒業」の強さと脆さはどこにあるでしょう？

木許●まずは、基本的な音楽の素養、いわば音楽の世界における「共通言語」を身につけているという信頼があるということです。その道のエキスパートとして活躍されている先生方や、同じ道を志す先輩後輩との深いつながりができる、ということも強みでしょう。しかしそれゆえに（音楽大学の学部にもよりますが）「音楽すること」が自明のものとなってしまっていて、なぜ音楽をするのか、なぜ音楽が社会に必要なのか、そもそも音楽とは何なのかということを考える機会があまり多くないのではないかと。音楽を成り立たせている「文化」や「歴史」を学ぶ機会も十分ではないようです。さらに、その専門性の高さゆえに、ときにクローズドな世界を作り上げてしまうこととなり、音楽以外との関わりや人生選択の幅が薄くなってしまうことがあるようにも思います。演奏のプロであると同時に、音楽の世界を外から眺める視点、広い意味での「離見の見」を併せ持った音楽家が必要とされているのではないのでしょうか。

—今年の手応えから、来年度以降どのようなことにチャレンジしていきたいですか？

今年もそうなのですが、いまの音楽界が抱えている問題を十分にリサーチした上で、そこに一石を投じるようなことをしたいですね。音楽家が音楽以外のことを学ぶ場を作るというポリシーは変わりませんし、もっともっと音楽を外に開いていきたい。それが結局回り回って音楽に返ってくるはず。たとえば東大生と音楽大学出身のアカデミー生が、ひとつのテーマをめぐってディスカッションするような場があってもいいなと思います。スピンアウトの「文章講座」や「世界史と音楽講座」も好評でしたから、続けていきたいです。今度は「日本史と音楽」も！